

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| 推進地区名 | 協力校名 | 児童生徒数 |
|-------|------------|-------|
| 京都市 | 京都市立勸修中学校 | 513 |
| 京都市 | 京都市立勸修小学校 | 420 |
| 京都市 | 京都市立小野小学校 | 465 |
| 京都市 | 京都市立四条中学校 | 315 |
| 京都市 | 京都市立安井小学校 | 320 |
| 京都市 | 京都市立山ノ内小学校 | 415 |

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

- (1) 学力向上プロジェクトチームと協力校による情報交換会の開催
- (2) 家庭学習の充実に向けた支援
- (3) 小中一貫した教育課程，ガイドライン等の構築
- (4) 学力向上に向けた研修会の開催
- (5) 学力分析の充実に向けた支援
- (6) 学力向上に関する教員向け啓発・指導資料の作成
- (7) 成果や効果のあった取組内容の全市発信
- (8) 学力向上推進協議会の開催

2. 推進地区における取組

- (1) 学力向上プロジェクトチームと協力校による情報交換会の開催
中学校区単位で各2回実施し，協力校の実態を把握したうえで，指導助言を行った。
- (2) 家庭学習の充実に向けた支援
東京書籍㈱の問題データベースや京都市小中一貫学習支援プログラム*の予習・復習教材の活用を促した。（*京都市独自のテスト形式も含めた学習支援プログラムで，小学3年生～中学3年生まで全15回実施。小学校は「プレジョイントプログラム」・「ジョイントプログラム」，中学校は「学習確認プログラム」という。）
- (3) 小中一貫した教育課程，ガイドライン等の構築
本市の全中学校区で具体的な実践を伴う小中一貫教育を進めた。
- (4) 学力向上に向けた研修会の開催
教育委員会主催の全国学力・学習状況調査研修会と各校での小中合同研修会，小中合同授業研

研究会等を実施した。

(5) 学力分析の充実に向けた支援

本市独自の学力分析システムの活用を促した。

(6) 学力向上に関する教員向け啓発・指導資料の作成

授業改善に向けた活用を促す資料作成に向けて検討を始めた。

(7) 成果や効果のあった取組内容の全市発信

学力向上に効果のあった具体的な取組を紹介するリーフレット「学びのコンパス」を発行し、全市への発信を行った。

(8) 学力向上推進協議会の開催

大学関係者を交えた「学力向上推進協議会」により、協力校の実態を把握したうえで、指導・助言、協力校の教員を対象にした研修会を行った。

3. 協力校における取組

(1) 勸修中学校区（勸修中，勸修小，小野小）

①問題データベースや京都市小中一貫学習支援プログラムの予習・復習教材を活用した家庭学習・補充学習の充実

②基礎基本の徹底

③言語活動の充実

④学習計画表の作成及び実施上の工夫・改善

⑤自主学習の実施等，自律した学習者を目指した家庭学習の充実

⑥学校図書館・地域図書館の充実・活用

(2) 四条中学校区（四条中，安井小，山ノ内小）

①基礎基本の徹底

②言語活動の充実

③「読む力」「書く力」を向上させるための国語科を軸とした小中連携

④主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善

⑤授業でのめあて，振り返りの徹底

⑥家庭学習啓発のためのリーフレット作成

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 勸修中学校

本市独自の学習確認プログラムの対市平均（以下「指数」）が伸びた学年，教科があり，基礎基本の徹底の成果が表れた。また，授業における話し合い活動に関して，自らの意見を言える生徒が増えるなど，生徒の意識向上が見られた。

(2) 勸修小学校

授業での話し合い活動が充実したり，児童の家庭学習，読書に対する意識が高まったりするなどの成果が現れた。

(3) 小野小学校

プレジョイントプログラム、ジョイントプログラムの指数が伸びた学年がある。また、児童の授業や家庭学習に対する意識が高まった。

(4) 四条中学校

新しい学習指導要領に向けて、生徒が授業の中で主体的に取り組む姿勢や、対話的な活動について、指導者側も工夫改善を行い、生徒の主体性が向上した。また、国語科を中心に全教科で「言語活動」を徹底的に取り組んできた成果が数値として表れ、授業の中で自らすすんで発表できている生徒の割合が大幅に増えた。

(5) 安井小学校

書く力がついてきており、プレジョイントプログラム、ジョイントプログラムの指数が伸びた。また、児童の興味関心を引き出す教材開発を意識し、主体的に授業に参加する児童が増えてきた。

(6) 山ノ内小学校

話す・聞く姿勢及び読む力が改善傾向にあり、授業での話し合い活動の成果が見られる。また、自学自習の学習時間の改善が見られ、家庭学習リーフレットの発行など、取組の成果が現れている。

2. 実践研究全体の成果

中学校区で一体となって学力向上に向けて取り組む協力校の意識や教職員・児童生徒の意識が上向きになったことは大きな成果である。

3. 取組の成果の普及

本研究での成果や学力向上に効果のあった具体的な取組を紹介する、学力向上に関する事例を掲載する教員向けリーフレット「学びのコンパス」(第12号, 第13号)を発行し、全市立学校教員へ配布するとともに、インターネットにより発信した。

○ 今後の課題

課題

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、平均正答率が全国平均を下回った学校数が3割以上あり、引き続き、学力水準の底上げが必要である。また、平日の授業以外の学習時間が「30分より少ない(「全くしない」を含む)」と回答した割合は、小学校(㊸11.9%→㊹10.5%, 全国平均:9.9%), 中学校(㊸19.1%→㊹20.4%, 全国平均:12.8%)で、中学校では全国平均を上回った。また、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と回答した割合も、小学校(㊸63.0%→㊹68.1%, 全国平均:71.5%), 中学校(㊸43.8%→㊹42.6%, 全国平均:50.4%)ともに全国平均を下回り、家庭学習や自学自習の習慣化が引き続き課題といえる。

【平成31年度 全国学力・学習状況調査 平均正答率】

| | 小学校調査 | | 中学校調査 | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 国語 | 算数 | 国語 | 数学 | 英語 |
| 京都市 | 67 | 68 | 73 | 61 | 56 |
| 全 国 | 63.8 | 66.6 | 72.8 | 59.8 | 56.0 |
| 全国平均を下回った学校数 | 53 (33%) | 61 (37%) | 34 (47%) | 29 (40%) | 30 (41%) |

課題を解決するための手立て

(1) 学力向上プロジェクトチームと学校による「情報交換会」の開催

教育委員会の学力向上の支援の在り方について研究するため、学力向上プロジェクトチームと学校による情報交換会を引き続き開催し、訪問校の授業参観を行うなど、児童生徒の実態を把握したうえで、指導・助言を行う。

(2) 家庭学習の充実に向けた支援

引き続き、東京書籍（株）の問題データベースと京都市小中一貫学習支援プログラムの予習・復習教材の活用を促す。

(3) 学力分析の充実に向けた支援

分析システムの活用を促進するため、使用したことがない学校や教職員等を対象に使用方法を教える。また、分析結果を取組の改善に活かす具体的手法について指導・助言する。また、児童生徒一人ひとりのつまずきや課題を把握し、適切な手立てを講じるため、京都市小中一貫学習支援プログラムの結果資料のS P表についても、全国学力・学習状況調査と併せて引き続き活用を促す。

(4) 学力向上に関する教員向け啓発・指導資料，好事例紹介資料等の作成

新学習指導要領で求められる指導内容・方法を踏まえ、授業改善に向けた活用を促す資料を作成し、全教職員に配布する。また、本研究での成果や学力向上の効果のあった具体的な取組について引き続き「学びのコンパス」で紹介し、全市へ発信・普及する。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|-------|-----|
| 推進地区名 | 京都市 |
|-------|-----|

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1) 教育委員会の担当課長等の行政職、担当首席指導主事、参与等の教育職の混成による「学力向上プロジェクトチーム」と協力校との情報交換会で、各協力校による学習指導の取組状況を「全国学力・学習状況調査」や本市独自の「京都市小中一貫学習支援プログラム」の数値で検証し、結果を踏まえた授業改善や学力を最大限伸ばす指導の充実を図る。
- (2) 効果的な家庭学習の充実を確立し、支援することで協力校の学力定着を確実なものにするとともに、教育委員会としての支援の在り方について研究する。
- (3) 9年間の系統性ある教育課程や指導方法の構築に向けて協力校への指導助言を行い、小中一貫の観点も取り入れた中学校区全体の学力向上を図る。

2. 研究課題への取組状況

- (1) 「学力向上プロジェクトチーム」と協力校による情報交換会の開催

「学力向上プロジェクトチーム」と協力校との情報交換会を中学校区単位で各2回実施した。情報交換会前に授業参観し（参観校は中学校区のうち1校）、協力校の実態を把握したうえで、各校が構想や課題、課題解決に向けた取組、取組の評価を記載した「学力向上マネジメントシート」、全国学力・学習状況調査や京都市小中一貫学習プログラムの結果等について、詳細な分析、検証や指導助言を行った。

【勸修中学校区<勸修中、勸修小（会場校）、小野小> 第1回】

・開催日：令和元年7月10日（水）

・主な指導助言内容：

- ・「まとめの時間」設定や「本時の目標、まとめ・振り返り」の質的向上、生徒の学びを深めるための授業終末時の時間確保などによる授業改善など、限られた時間での効率的・効果的な実践活動をより一層推進することにより、生徒一人一人の学力向上に努めること。
- ・3校の共通する課題である自己肯定感や自ら学ぶ意欲を高める実践活動を一層推進すること。
- ・学習計画表について、主体的に子どもたちが取り組めるようなアイデアを教員が出して考えるなど、創造的なものになるよう、また保護者が児童の学習に関心を持ってもらえるよう

工夫を行うこと。

・学習確認プログラムの結果をみる際は、平均点だけでなく、各層のばらつきを見て、低位層の指導のあり方を考えるなど、個別の課題の解決に向けた工夫も行うこと。

【勸修中学校区<勸修中（会場校）、勸修小、小野小> 第2回】

・開催日：令和2年2月5日（水）

・主な指導助言内容：

・3学期にはこれまでの実践のまとめを行うとともに、共通した教育課題（言語・身体・探究・道徳）への対応についての検証や児童生徒の情報共有等をより一層充実させること。

・自己肯定感や自己有用感の醸成、家庭学習の習慣化などの共通した課題への対策等について検討し、次年度につなげること。

・本時のねらいとまとめ・振り返りの徹底による授業改善、ノートやワークシートの工夫、教室環境のUD化などの取組を推進するとともに、学習評価を含めた新学習指導要領の全面实施に向けた研究・研修を深めること。

・教員同士、成果を学び合う場を設けるなどして、さらに教員の授業力が高まる実践を続けること。

・一人一人の児童が計画的に自分で学習していく力を身に付けられるよう、学習予定表の効果的な活用法などを引き続き検討すること。

(2) 「学力向上推進協議会」の開催

大学関係者と教育委員会の行政職、教育職職員による「学力向上推進協議会」を設置し、本市の実情や課題に即した推進計画を立てるとともに、本実践研究のために必要な指導・助言を行った。また「学力向上推進協議会」による授業参観を行い、協力校の実態を把握した上で、大学関係者を講師とした研修会を2回実施した。

【四条中学校区<四条中（会場校）、安井小、山ノ内小> 第1回】

・開催日：令和元年11月22日（金）

・講師：大手前大学 古田紫帆 准教授

・主な内容：

・会場校の授業の視察。

・授業改善を進めるため、普段の授業の中での「深い学び」と「主体的・対話的な学び」を関連付けた取組やそこで見られる子どもの姿を整理し、共有した。また今後の授業で取り組んでみたいことを考え、意見交換を行った。

【四条中学校区<四条中、安井小、山ノ内小（会場校）> 第2回】

・開催日：令和2年2月6日（木）

・講師：甲南女子大学 村川 雅弘 教授

・主な内容：

・会場校の全授業の視察。

・学力向上、授業改善、学校改革につなげるため、カリキュラム・マネジメントやアクティブラーニングについて、先進校の様々な事例を学び、意見交換を行った。

(3) 家庭学習の充実に向けた支援

東京書籍(株)の問題データベース(WEB上で様々な学習プリントを作成し、プリントアウトできるシステム)や京都市小中一貫学習支援プログラムの予習教材や復習教材について、市立学校各校の活用状況を比較、分析した。問題データベースについては、活用回数が極端に少ない学校に対して個別指導をし、活用を促した。京都市小中一貫学習支援プログラムの予習・復習教材については、協力校との情報交換会において、予習・復習教材を使って勉強していない児童生徒を減らすように指導した。また、学力向上に関する事例を掲載する教員向けリーフレット「学びのコンパス」で、中学校区で作成した「家庭学習の手引き」を紹介し、家庭学習の重要性を示した。

(4) 小中一貫した教育課程、ガイドライン等の構築

全中学校区で、学習規律の統一や学びのガイドライン等の作成のほか、9年間を見通した具体的な目標や授業の視点を明確にし、系統性・連続性ある教育課程の構築、実践を推進した。

(5) 学力向上に向けた研修会の開催

①全国学力・学習状況調査研修会の開催

全国学力・学習状況調査における全市的な傾向、課題及び今後の改善策を校種別・教科別に発信した。「主体的・対話的で深い学び」やカリキュラムマネジメントを踏まえた授業改善、板書とノート指導のあり方、テスト問題の改善、授業と家庭学習を繋げること等に関して具体的な事例を示した。

②各中学校区での小中合同研修会、小中合同授業研究会等の実施

小中9年間で一体となって、出口を見据えた学力向上を推進するため、小中合同研修会及び小中合同授業研究会を各中学校区で開催した。各校の課題を共有し、学力向上に向けた具体的な取組を検討したり、小中学校の教員が一緒になって学習指導案を作成したりするなど、中学校区ごとに工夫された研修を行った。

(6) 学力分析の充実に向けた支援

小学校3年生からの学力結果推移の閲覧や学年間比較、アンケート結果と学力テスト結果とのクロス分析が可能な本市独自の分析システムに関して、具体的な分析方法や支援等について周知した。

(7) 学力向上に関する教員向け啓発・指導資料の作成

新学習指導要領で求められる指導内容・方法を踏まえ、授業改善に向けた活用を促す資料作成に向けて検討を始めた。

(8) 取組内容を全市へ発信

本研究での成果や学力向上に効果のあった具体的な取組を紹介する、学力向上に関する事例を掲載する教員向けリーフレット「学びのコンパス」を2号発行し、全市立学校教員へ配布するとともに、HPで市民へ発信した。

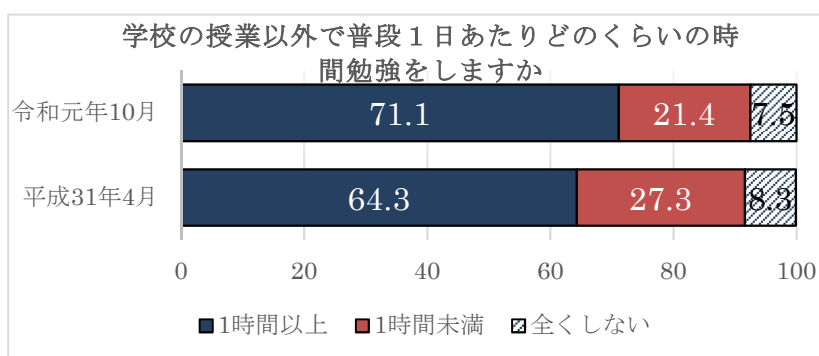
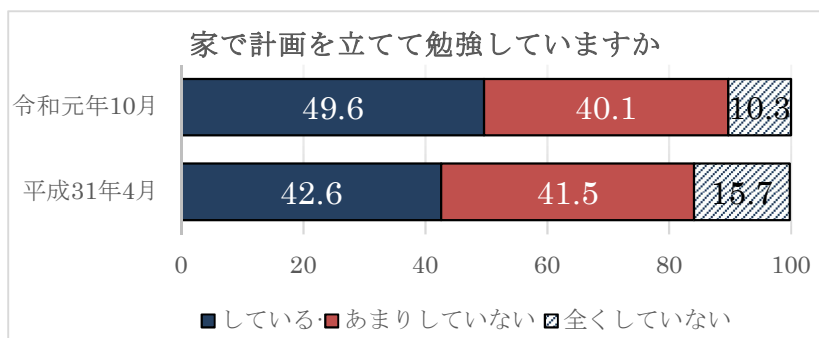
3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 学力や学習習慣に係る数値から見る成果

①学習習慣について

令和元年度4月と10月の学習習慣について比較すると、中学校3年生では、「家で計画を立てて勉強している」生徒が増えた。また、家で1時間以上勉強する生徒が増え、全く勉強しない生徒が減少した。

【中学校：全国学力調査生徒質問紙（平成31年4月） 及び 学習確認プログラムアンケート（令和元年10月）結果より】



②東京書籍問題データベース活用状況

令和元年度5月末現在と12月末現在の活用状況を比較すると使用回数が0回の学校の数が減少し、（5月：32校→12月：15校）、今年度中に一度も使用したことのない学校は1月末現在で3校のみとなっている。引き続き、活用を促していきたい。

（2）協力校の成果

①学力向上プロジェクトチームと協力校による情報交換会の効果

授業参観を通して実際に学校や子どもたちの様子を見たうえで、各校の実態に沿った指導助言を行うことができた。情報交換会には管理職だけではなく、教務主任や研究主任など、具体的な取組推進の核となる教員も参加した。中学校ブロックで改めて、学力向上の取組や課題について共有するとともに、一般教員から他教員へ周知できる点や人材育成の点で有効であったと考える。

②協力校の学力向上や小中一貫教育の充実

勸修中学校をはじめ、取組の成果が具体的に数値に表れた協力校がある。また、本研究を通して学力向上や小小連携、小中連携の意識の高まり、具体的な取組の推進がみられた。特定の教科や学年での成果をきっかけに、教職員のモチベーションを高め、取組の継続と徹底をしていく必要がある。

（3）全国学力・学習状況調査に関して

全国学力・学習状況調査の結果を受けて、家庭での学習時間や計画的な学習の実施状況について経年比較し、本年度の取組の検証及び成果・課題の把握をより詳細に行い、次年度の研究内容につなげる。

4. 今後の課題

課題

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、平均正答率が全国平均を下回った学校数が3割以上あり、引き続き、学力水準の底上げが必要である。また、平日の授業以外の学習時間が「30分より少ない（「全くしない」を含む）」と回答した割合は、小学校（㉔11.9%→㉕10.5%、全国平均：9.9%）、中学校（㉔19.1%→㉕20.4%、全国平均：12.8%）で、中学校では全国平均を上回った。また、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と回答した割合も、小学校（㉔63.0%→㉕68.1%、全国平均：71.5%）、中学校（㉔43.8%→㉕42.6%、全国平均：50.4%）ともに全国平均を下回り、家庭学習や自学自習の習慣化が引き続き課題といえる。

【平成31年度 全国学力・学習状況調査 平均正答率】

| | 小学校調査 | | 中学校調査 | | |
|----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 国語 | 算数 | 国語 | 数学 | 英語 |
| 京都市 | 67 | 68 | 73 | 61 | 56 |
| 全 国 | 63.8 | 66.6 | 72.8 | 59.8 | 56.0 |
| 全国平均を 下回った学 校数 | 53 (33%) | 61 (37%) | 34 (47%) | 29 (40%) | 30 (41%) |

課題を解決するための手立て

(1) 学力向上プロジェクトチームと学校による「情報交換会」の開催

教育委員会の学力向上の支援の在り方について研究するため、学力向上プロジェクトチームと学校による情報交換会を引き続き開催し、訪問校の授業参観を行うなど、児童生徒の実態を把握したうえで、指導・助言を行う。

(2) 家庭学習の充実に向けた支援

引き続き、東京書籍（株）の問題データベースと京都市小中一貫学習支援プログラムの予習・復習教材の活用を促すとともに、それらを活用した学習の時間をより詳細に把握できるよう、子どもへのアンケート項目を改善する。

(3) 学力分析の充実に向けた支援

分析システムの活用を促進するため、使用したことがない学校や教職員等を対象に使用方法を教える。また、分析結果を取組の改善に活かす具体的手法について指導・助言する。また、児童生徒一人ひとりのつまずきや課題を把握し、適切な手立てを講じるため、京都市小中一貫学習支援プログラムの結果資料に追加したSP表について、引き続き、全国学力・学習状況調査と併せて活用を促す。

(4) 学力向上に関する教員向け啓発・指導資料、好事例紹介資料等の作成

新学習指導要領で求められる指導内容・方法を踏まえ、授業改善に向けた活用を促す資料を作成し、全教職員に配布する。また、本研究での成果や学力向上の効果のあった具体的な取組について引き続き「学びのコンパス」で紹介し、全市へ発信・普及する。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立勧修中学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・ 基礎的、基本的な知識の未定着な生徒が一定数おり、思考・判断・活用といった力が不足していると考えられる。
- ・ 家庭学習計画表をしっかりと作成できている生徒は減少傾向ではあるものの、自学自習ができている生徒は増加傾向にある。
- ・ 日常的な読書習慣が未定着である。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本の定着、思考・判断・活用の力の育成に関して

- ・ 言語活動を軸に「かかわりあい」を重視した学習活動（授業）を展開した。
- ・ 毎週木曜日にNPOや地域の方々の協力による放課後学習会を実施した。
- ・ 学習確認プログラムの予習・復習シート及び東京書籍問題データベースを積極的に活用した。
- ・ 教科授業の進度確認につながるよう学習確認プログラム前に「まとめの時間」を設定した。
- ・ 帯時間に新聞記事を読み、意見を記述することに取り組んだ（週1回）。
- ・ 数学では、インプット学習（習得）に力点を置きながら「考える力をつけていくこと」をメインの目標として定め、着実に実践を行った。
- ・ 各教科目標を再検討し、「生徒につけたい力」を明確して教科目標達成に向けた教員の意識向上に努めた。特に令和元年度においては、「ふりかえり」について、授業内での取組を進めた。

(2) 学習習慣に関して

- ・ 学習計画表の作成を通して学習への意識を高め、実践していこうとする意欲を定着していくことを目指し、帯時間等において計画表を作成した（週1回）。
- ・ 家庭での学習習慣定着に向けて、家庭学習課題を出した。

(3) 読書に関して

- ・ 勧修小学校と小野小学校の読書カードの取組を継承するものとして、帯時間に朝読書を行った（週3回以上）。

- ・図書室の開館日を毎日として生徒の活用に機会を増やした。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本の定着、思考・判断・活用の力の育成に関して

- ・帯時間の新聞記事の取組により、書くことに抵抗がなくなっている。また、地域への関心が高まり、入試の面接練習において社会に対する意見を発言できる生徒が増えた。
- ・学習確認プログラムの結果では、1年（指数87→95）、2年（指数94→99）で伸びが見られた。
- ・授業における話し合い活動については、伸びが見られ、自らの意見を言える生徒が多くなってきている。引き続き、シェア型学習につながるアウトプット型の学習の工夫が求められる。

【学校評価における生徒アンケート結果より】

「授業の中で話し合い活動ができている」

| | |
|--------|-------|
| 30年度後期 | 元年度後期 |
| 81.0% | 87.0% |

「授業において自分の意見が言えている」

| | |
|--------|-------|
| 30年度後期 | 元年度後期 |
| 56.2% | 64.3% |

(2) 学習習慣に関して

- ・課された宿題や課題はできる生徒が多いが、見通しを持って自主的に計画を立てて勉強できる生徒の割合は多くない状況である。「学習計画表をしっかりと作成できている生徒」は減少しているものの、「計画のある自主学習ができている生徒」は増加してきている。このことから計画を立てること自体に重きを置いていた生徒が実質的に学習に向かおうとしている傾向が伺われる。今後、個々の生徒のニーズに応じた学習計画表の内容等の検討が必要である。

【学校評価における生徒アンケート結果より】

「家庭学習計画表はしっかりと作成できている」

| | |
|-------|-------|
| 元年度前期 | 元年度後期 |
| 53.5% | 47.9% |

「計画のある自主学習ができている」

| | |
|-------|-------|
| 元年度前期 | 元年度後期 |
| 46.1% | 52.1% |

- ・3年では、「家で自分で計画を立てて勉強している」生徒が増えた。

【全国学力・学習状況調査生徒質問紙結果 及び 学習確認プログラムアンケート結果より】

「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。」

| | 全国学力調査 生徒質問紙 (平成31年4月) | 学習確認プログラムアンケート (令和元年10月) |
|-------------------------|---------------------------|-----------------------------|
| している。 どちらかといえば、している。 | 41.8% | 52.9% |
| あまりしていない。 まったくしていない。 | 58.1% | 47.1% |

- ・学力実態に係る各種の指標の結果から、学力の二極化が大きく見られ、普段の授業においても支援の必要な生徒についての対応に苦慮する場面がある。インプット学習、アウトプット学習、シェア学習のバランスを取りながら、支援の必要な生徒への多角的なアプローチを考えていくことが重要である。

(3) 読書に関して

- ・1年生については、全クラスにおいて図書室を活用した授業を展開しているところだが、他学年には波及していない。特定の学年、教科によらず計画的かつ積極的に活用をしていけるようにすることが求められる。

【学校評価における教職員アンケート結果より】

「図書室を活用した授業が行えている」(教職員)

| 元年度前期 | 元年度後期 |
|-------|-------|
| 31.3% | 15.4% |

- ・昨年度より改善が見られたものの、家庭で「全く読まない」生徒の割合は依然高い。学校での朝読書の取組以外の手立てを考えていくことは必要である。

【全国学力・学習状況調査生徒質問紙結果より】

「学校の授業以外での一日当たり全く読書をしない」

| 30年度 | 元年度 |
|-------|-------|
| 45.1% | 43.0% |

4. 今後の課題

(1) 基礎基本の定着、思考・判断・活用の力の育成に関して

- ・引き続き、基礎基本の定着を推進するため、東京書籍問題データベースの効果的な活用を促す。
- ・基礎基本の知識を活用した「深さ」につながっていく授業展開を目指し、教員の指導力向上や教材・教具の工夫を通して、生徒の学力向上に繋げる。
- ・実践における成果が数値として表れてきている。今後においても良かった取組などを分析し、他教科や他学年にも効果的な取組を波及させる。
- ・地域人材を活用し、テスト前学習会、教科学習会、放課後学習会など、学習の機会と場所の提供を充実させる。また、「学校として取り組めること」を実践化する。

(2) 学習習慣に関して

- ・学校内における生徒個々の学力差が大きいため、学習における支援について協議し、実践してい

くことが望まれる。

- ・学習計画表については、記入項目を改善していきながら、生徒が実際に家庭で学習していく時間を増やしていけるようにしていくことが必要である。
- ・家庭学習の方法や内容について具体的に指導していく。

(3) 読書に関して

- ・学校図書館の利用促進に向けて、蔵書の充実、新刊の案内に取り組む。
- ・読書記録カードを活用し、読書量を可視化することで意欲につなげたり、国語科と連携して質の向上にも取り組む。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立勧修小学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・基礎・基本の学力の定着に課題がある。特に、国語の長文や算数の問題文を読むことに抵抗感を感じたり、文章や問題文から必要な情報を抜き取ったりすることに課題が見られる。
- ・学習予定表の取組により、家庭学習が定着しつつあるが、30年度学校評価アンケートで「宿題や家庭学習ができていない」と回答した2割程度の児童の底上げが必要である。
- ・読書時間の少なさが課題であり、読書活動の確保と充実（地域図書館との連携等）を図る取組を進めていく必要がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・見通しを持てるように、また、学習のヒントとなる既習事項を教室掲示した。
- ・語彙を増やす取組として、「辞書引き」を実施した。
- ・図や表を使って根拠を明らかにするなど、ノート指導を充実した。
- ・思考力・判断力・表現力を培うために、総合や国語などでピラミッドチャート、クラゲチャートなどの思考ツールの使い方を教えながら、話し合う活動を取り入れた。
- ・様々な文章や資料を読む機会や自分の意見を書く機会を充実した。
- ・テキストを理解、評価しながら読み、テキストに基づいて自分の考えを書く取組を行った。

(2) 学習習慣に関して

- ・学習計画表を配布し、朝学習で記入する時間を設けた。
- ・学習したことを実生活と結びつけて取り組めるような自主学習を行うよう意識した。

(3) 読書に関して

- ・読書活動の時間を1校時前の朝の20分間を確保した。
- ・地域図書館と連携し、ブックトークを実施した。
- ・各教科の単元内容と関連のある本を学校司書との連携をしながら子どもたちが手に触れられ

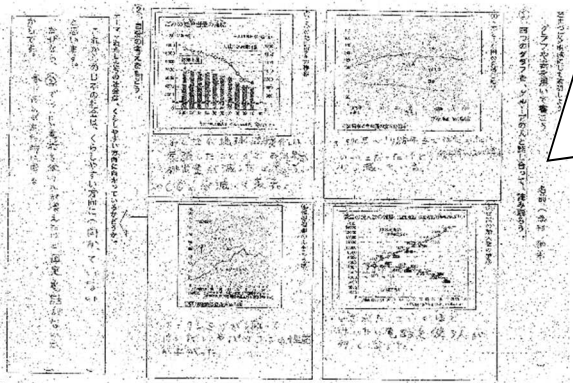
るようにした。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・思考ツールの活用によって、自分の意見だけでなく、友達の見見も見え、話し合いが活性化した。また、自分の意見がなかなか言えない児童も、付箋を出すことで話し合いに参加しやすい雰囲気になった。一方、思考ツールは思考を深め、話し合いを活性化させる道具であることを指導者自身が認識する必要がある。また、様々な思考ツールを活用できるように教え、児童が自分で選べるようになることが理想的である。

【取組紹介】図や表、グラフがある報告文章を読んで、目的や意図に応じて自分の考えの理由を明確にして書くために



- ① グラフの読み取り方（注目する場所）をしっかりと押さえる
- ② 一人で読み取る。
- ③ グループで交流し、自分の気づかなかった視点に気づく。（考えの幅を広げる）
- ④ 自分の考えを理由（読み取ったことの中から選んで）を明確にして書く。

- ◇ 事実と自分の考えを分けて考えることができるように…
- ◇ 繰り返し、自分の立場を明確にして…
- ◇ 意図的に交流の時間を設定し、考えを深めていく…



(2) 学習習慣に関して

- ・「家で宿題や勉強をきちんとしている」児童が昨年度から増加した。自主学習を継続させるために、学校の中で学習計画予定表を立てる時間をしっかりと確保するとともに、実生活と結びつけた自主学習によって、児童の意欲につなげたい。

【学校評価における児童アンケート結果より「家で宿題や勉強をきちんとしている」】

| 30年度 | 元年度 |
|-------|-------|
| 85.1% | 87.7% |

- ・テーマを設けて課した自主勉強は、授業のノートを書き写すだけでも復習をすることになり、それを継続するにつれて、授業のノートを写すだけでなく、自分で工夫して要点をまとめることが

できるようになった児童もいた。

【取組紹介】

⑫ おかしの塩分(食塩相当量)を調べよう。

| おかしの名前 | 塩分(食塩相当量) |
|--------------|----------------|
| ミニロードス(100g) | 1.73g(100gあたり) |
| カール(100g) | 1.73g(100gあたり) |
| チョコパイ(100g) | 0.7g(100gあたり) |
| チョコパイ(100g) | 1.4g(100gあたり) |
| チョコパイ(100g) | 0.03g(100gあたり) |
| あられ(100g) | 1.73g(100gあたり) |

1番塩分が少いのはい？(家の中にあった物)
あられ(えびかり)
↓
100gあたり、1.73g

1番塩分が多いのは？(家の中にあった物)
チョコパイ
↓
100gあたり、0.03g

⑬ 自分がお菓子を食べたとき、おかしには塩分がどれくらい入っているのかを調べよう。

⑭ そうじの仕方を実際に行おう。

⑮ そうじをする時家と学校をくらべてみよう。

| 学校 | 家 |
|---------|---------|
| ・ゆか(洗剤) | ・ゆか(洗剤) |
| ・バスマット | ・バスマット |
| ・トイレ | ・トイレ |
| ・洗面所 | ・洗面所 |
| ・床 | ・床 |
| ・机 | ・机 |
| ・椅子 | ・椅子 |
| ・壁 | ・壁 |
| ・天井 | ・天井 |
| ・窓 | ・窓 |
| ・ドア | ・ドア |

これを防ぐにはどうすれば良いのか？

使う物

| 学校 | 家 |
|--------|--------|
| ・かみそり | ・かみそり |
| ・歯ブラシ | ・歯ブラシ |
| ・タオル | ・タオル |
| ・掃除機 | ・掃除機 |
| ・洗濯機 | ・洗濯機 |
| ・乾燥機 | ・乾燥機 |
| ・電子レンジ | ・電子レンジ |
| ・冷蔵庫 | ・冷蔵庫 |
| ・洗濯機 | ・洗濯機 |
| ・乾燥機 | ・乾燥機 |
| ・電子レンジ | ・電子レンジ |
| ・冷蔵庫 | ・冷蔵庫 |

⑯ 私は前、セロハンテープでゴミを貼る、大掃除もその場所で勉強してると考えた。しかし、そうじするのは大変だと改めて思いました。

学習したことを実生活と結び付けて...

- 塩分の取りすぎには、注意したい→栄養教諭からもコメントもらい、やる気アップ!
- セロハンテープでゴミ取りをしたら、たくさんのごみが取れた。掃除って大切だな。→家庭科で友達から教えてもらった掃除の仕方を家で実践。

(3) 読書に関して

・朝読書だけでなく、課題が終わってからの少しの時間に本を読むことを推奨し続けたところ、読みたい本を持ってくる児童も見られるようになり、それらを児童間で紹介しあったり、教室に置いておいて誰でも手に取って読んだりする取組を、児童自らが始めるようになった。



地域による読み聞かせ



醍醐中央図書館との連携 (ブックトーク)

4. 今後の課題

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・児童が「できた」「分かった」という実感が持てるような授業を構築し、児童の自信につなげる。
- ・授業改善の素地として学校全体で学習規律の統一を図ったり、基本的学習のプロセスや振り返りの言語化についてスタンダードを作成したりする。
- ・「書くこと」にかかわって、授業の振り返りではテーマを与えたり、字数制限をしたりすることで、書くことに対する抵抗感をなくしていく。

(2) 学習習慣に関して

- ・学習計画表については、実際の学習の充実につなげるため内容を改訂する。
- ・家庭との連携を図りながら低学年から系統的に力を積み上げていくとともに、家庭学習の方法や内容について具体的に指導していく。
- ・自学自習については、できていることとできていないことを教員がチェックし、学習方法等について指導する。
- ・学校で学習したことを実生活と結びつけられるよう授業の中でも意識した指導を行う。

(3) 読書に関して

- ・学校図書室の利用促進に向けて、蔵書の充実、新刊の案内に取り組む。子どもたちが本に触れる時間を保障し、読書の楽しさを実感できるようにする。
- ・読書活動において、読書ノート等を活用し、自分の読んだ本の内容を振り返られるようにしたり、友達同士で紹介しあったりできるような取組をすすめる。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立小野小学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・30年度全国学力・学習状況調査の結果は全ての教科で京都市及び全国平均を4～7ポイント下回った。思いや考えを文にしたり、話したり伝えたりする力に課題がある。授業における積極的な言語環境や機会の充実が図られていないことが原因と考える。
- ・30年度学校評価アンケートにおいて「家で宿題や家庭学習を毎日している」児童は29年度から微増したが、家庭学習の提出率は低下した。学習予定表を活用しているが、具体的な学習時間やスケジュール、学習方法等について考えることに課題がある。
- ・読書習慣に向けての取組では、100冊マラソンで、低学年は学級の半数近くの子どもが達成できているが、高学年へ学年が上がるにしたがって割合が低く、2割程度となっている。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・話型や話し合い活動の進め方・話を聞くポイントなどを掲示し、言語活動の環境を整えた。
- ・1時間の授業の中で学習課題の解決のために、いろいろな形で表現する場を設けるとともに、めあて、振り返りを授業の中にしっかりと位置づけ、子どもたち一人一人が学習を振り返る場を設定し、自己の学習を評価できるようにした。
- ・学習の場面で、意図的にペア学習やグループ学習を取り入れた。
- ・自分の考えを分かりやすく伝える力を高めるため、ノート指導を充実した。ワークシートも工夫をし、自分の意見や考えを表現できる形にした。
- ・家庭学習に音読や漢字練習を継続的に取り入れ、言語表現や文字にふれる機会をふやすことで、自分の文章表現に生かしていけるようにした。
- ・モジュール学習を継続して実施し、漢字・計算などの主体的で対話的で深い学びを支える、基礎基本の学習に取り組んだ。
- ・理科は引き続き専科教員を配置した。

(2) 学習習慣に関して

- ・小学校で学習習慣を付けて中学校につなげるため、高学年から自主学習（1週間に2ページ）の取組を続けている。

- ・子どもたちの実態に見合った家庭学習の内容やあり方について共通理解するとともに、学校便りや懇談などで保護者に家庭学習の大切さについて発信した。
- ・学習計画表を配布し、モジュール学習で記入する時間を設けた。
- ・主体的な学習へとつながるように、学年が上がるにつれて児童自身で記入するところを増やすなど、学習予定表を改善した。また、勸修中学校の様式に合わせることで、中学校へのつながりを大切にした。また、土曜日スタートとし、直近の週末の予定を考えられるような形とした。

(3) 読書に関して

- ・読書週間を設け、教員による読み聞かせや、今年度は4年生が他学年に読み聞かせる「縦割り読書」を実施した。
- ・1年生全員が地域図書館の図書カードを作成し、本を借り、保護者と一緒に返却する取組を行った。
- ・図書館に入れてほしい本を学校司書にリクエストするなど、学校司書と連携しながら積極的に図書館活用につなげた。
- ・朝モジュール学習の時間には、読書を取り入れ、お気に入りの本を図書館や家で用意して、読書をする時間を確保した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・ジョイントプログラムにおいて、算数の基礎基本にかかわる部分として、5年生の「計算」の問題について全市と比較すると以下の通りとなる。

問題で正答した児童の割合と無解答率 (%)

| 正答した児童の割合 | | 無解答率 | |
|-----------|------|------|-----|
| 小野小 | 京都市 | 小野小 | 京都市 |
| 75.1 | 77.1 | 0.6 | 2.2 |

全市と比べ、正答率の差は比較的小さく、課題の一つであった無解答率は全市より低い。6年生においても、同じ計算にかかわる問題では、全市との正解率の差が小さくなっている。基礎基本の定着を目指した取組は、結果として見え始めている。ここから、さらにどう学力を伸ばしていくかは大きな課題である。4年生においては全体的に全市との差が大きく、いわゆるD層が多く、ここへの働きかけも課題の一つである。

- ・漢字の読み書きや言葉、計算問題については全市平均を下回る問題が多数あり、基礎基本の定着に課題が残る。基礎基本の定着に向けた取組の工夫や継続した取り組みが必要となる。
- ・5、6年では理科の成績が他教科よりも良く、専科教員の導入の成果が出てきている。「理科が楽しい」と言う児童も増えている。

(2) 学習習慣に関して

- ・学習予定表を改善したことが、子どもたちの家庭学習の意識の高まりにつながっている。
- ・家庭での学習習慣が定着している子ほど、学力状況が安定している。また、ジョイントプログラムでの4階層を見ると、どの学年もD層が少しずつ減ってきている。上位層はそれほど多くはないが、A、B層をどう増やしていくかが課題であり、さらなる学力の底上げが必要である。
- ・「家で宿題や家庭学習を毎日している」児童は、毎年少しずつ増えている。学習予定表の取組が定着してきていることを表してはいるが、学習予定表の活用としては不十分な児童も少なくなく、具体的な学習時間やスケジュール、学習方法等について考えることについて課題が残る。

【学校評価における児童アンケート結果より「家で宿題や家庭学習を毎日している」】

| 平成30年度 | 令和元年度 |
|--------|-------|
| 87.6% | 89.4% |

さらに、国語科では、「書く」の単元を重点単元として取り扱う必要がある。また、漢字の書き取りだけでなく、辞典等を活用し、意味や成り立ちなどを詳しく調べられる時間の確保も必要である。算数科では、基礎基本の定着とともに、回答に至るまでの道筋を大事にした学習の流れを意図的に授業の中に取り入れていく必要がある。日々の生活の中から、自己肯定感を上げ、成就感を味わえるような取り組みを継続して取り組む必要があり、そのことが学習習慣の定着、醸成につながると考えている。

(3) 読書に関して

- ・読書ノートを活用し、読書への意欲付けを行ってきた。図書館割当の時間は全クラス活用しているが、それが子どもたちの日常的な読書に繋がっていない。朝のモジュールの時間を使っての「朝読書」の取り組みを行っている。
- ・「家でも読書をしている」児童は昨年度よりも減少した。

【学校評価における児童アンケート結果より「家でも読書をしている」】

| 平成30年度 | 令和元年度 |
|--------|-------|
| 65.7% | 57.6% |

- ・学校図書館での本の貸出冊数は、昨年度より増えている。意図的に読書活動に取り組んだ成果と考えられる。

4. 今後の課題

(1) 基礎基本の定着、表現力の育成に関して

- ・個々の課題に応じた手立てを通して基礎学力の向上を目指す。
- ・授業の「めあて、ふりかえり」については授業の中に定着はしてきているが、特にふりかえりについては、学力向上部会でガイドラインを設定し、発達段階に応じた内容を全学級で取り組むことを継続的に行っていく。また、テーマを与えたり、字数制限をしたりすることで、書くことに対する抵抗感をなくしていくなどの工夫を行う。
- ・まだまだ、教師主導の指導形態の授業もあり、児童の意欲的な学びにつながっていない場合があ

り、学習意欲維持につながっていない場合がある。

- ・グループワークなど、主体的な問題解決の場面を意図的に取り入れ、コミュニケーション能力や集団解決力の向上、学習維持の改善を目指す。

(2) 学習習慣に関して

- ・学習計画表について、実際の学習の充実につなげるため内容を改訂する。書くべき項目を「いつ、何をするか」とし、学習時間の確保のための時間管理を意識させる。
- ・低学年から系統的に力を積み上げていくとともに、家庭学習の方法や内容について具体的に指導していく。
- ・自学自習については、継続して取組を進めていく。担任等がしっかりとチェックをし、学習方法等について交流等を通じて取組が難しい児童へも働きかけを行っていく。
- ・基本的な生活習慣の確立ができていないことが多く、家庭学習の徹底がなかなか定着しない現状にある。生活調べに「ふりかえり週間」を設けるなど、保健部などとも連携しながら、子どもたちの生活習慣の指導と並行して進めていく。

(3) 読書に関して

- ・学校図書室の利用促進に向けて、蔵書の充実、取組の工夫を行う。特に、児童の読書活動の確保と充実を図るため、児童の意欲を高めるような工夫と取組を行っていく必要がある。
- ・学校司書との連携をしっかりととり、学校司書の活用を積極的、効果的に行っていく。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立四条中学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・30年度全国学力・学習状況調査では、数学・理科で全市平均を大きく下回った。
- ・自分の意見を伝え、相手の意見を聞いて、相手の思いを読み取る力が弱く、自分の考えを文章化し、表現する力が定着していない。また、「読むこと」に課題が見られ、長文になると最後まで読み切ることができない生徒が多い。
- ・家庭学習の習慣化がされていないため、知識理解を中心とした基礎基本が定着していない。
- ・「授業において、学習の振り返りがきちんとできている」生徒の割合が低い。授業改善の中で課題設定と授業の振り返りを充実させるための教職員の意識が弱い。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本の定着、読解力、表現力の育成に関して

- ・新学習指導要領に向けて授業改善を行い、一人年1回の研究授業を実施した。
- ・充実した教科会及び教科主任会を通じて、有意義なOJTによる同僚性を構築した。
- ・テスト問題の改善と指導および評価の一体化をめざした。
- ・授業の振り返りを家庭学習と位置づけて自学自習を推奨した。
- ・図書館を活用した授業実践をおこなった。
- ・授業で反復練習を取り入れ、基本的な知識・技能の習得を図った。
- ・「表現力」を課題に設定し、全教科で言語活動を取り入れた。
- ・国語科においては、論理的文章の読解力を高める方法として、文章を書く力をつけることに取り組んだ。その一方法として、「慣用句」で短文を作り、単元のまとめとして200字～400字程度の作文を書いた。
- ・「習得・活用・探究」という思考過程を重視した授業改善に取り組んだ。
- ・「めあて→対話を通じた学び→振り返り」の授業サイクルの徹底を図った。
- ・指導と評価の一体化に向けて、テスト問題の抜本的な改革を進めた。思考判断の発問から知識理解の定着を確認できる問題を増やし、さらに記述問題の中で論理的思考を問える発問を取り入れた。
- ・地域図書館と連携し、ビブリオバトルを実施した。

- ・国語，数学，理科，英語でタテ持ちシステムを導入し，系統的な指導や指導力の向上を図った。教科会を週1回開催し，教科担任相互の有機的な授業内容を検証した。
- ・振り返り学習の定着に向け，ノート指導のさらなる改善を図った。

(2) 家庭学習に関して

- ・中学校区で家庭学習啓発のためのリーフレットを作成し，配布した。
- ・家庭学習を自分にあった方法に改善した。
- ・振り返り学習を充実する中で，家庭学習の定着を図った。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本の定着，読解力，表現力の育成に関して

- ・1，2年生の学習確認プログラムにおける国語の「書く」領域について昨年度よりも指数が伸び，書くことに対する抵抗がなくなってきた。
- ・「読むこと」については数値上の明確な伸びは見られず，課題が残る。長い文章になると，最後まで読み切ることができないこと，本文から根拠となる表現を探す際に，何度も読み返す根気強さと忍耐がないことが考えられる。また，幼少期より耳から入る言語情報，自宅にある書籍，学齢期に達してから学校以外で触れる書籍，新聞など言語に触れ，楽しみ，活用するという経験不足も一因と考えられる。
- ・基礎基本については，前年度までに学習した問題の正答率が低く，身に付いていない。復習による定着ができていないことや，言葉の意味が理解できていないために正答できないことが考えられる。
- ・授業改善に対する教職員の意識改革は進んだが，思考過程を重視した授業展開について改善の余地はある。また，「思考力，判断力，表現力を意識した指導ができている」教職員の割合が少ない。その理由として，学校教育目標の重要性は理解しているものの，どのように改善すべきか，また改善するための方法論が具体的に理解できていないことや，教科会や教科主任会を通じての協議が不十分なことが考えられる。
- ・授業での指導者側の工夫や改善にともない，子どもの主体性も向上してきた。
- ・新しい学習指導要領に向けて，子どもが授業の中で「主体的に取り組む姿勢」や「対話的な活動」については，指導者側も改善されつつあり，そのことが子どもの成果として出ている。

【学校評価における教職員アンケートより「思考力，判断力，表現力」の育成を意識した指導ができている】

| 30年度 | 元年度 |
|-------|-------|
| 84.2% | 89.0% |

- ・授業改善が進んだ結果，振り返りの時間がどの教科，領域でも設定されたことにより，学習の振り返りを意識してできている子どもの割合が増えた。

【学校評価における生徒アンケートより「授業において，学習の振り返りがきちんとできている」】

| 30年度 | 元年度 |
|-------|-------|
| 65.5% | 72.0% |

- ・国語科を中心に全教科で「言語活動」を徹底的に取り組んだ結果が数値として表れてきた。ものごとを論理的に考えることを意識的に取り組ませたことにより、「話を聴く」「聴いたことを自分で解釈し、理解する」「理解したことを文として表現する」という活動が定着してきた。子どもたちは、授業の中で指導者の板書を機械的に書き記すのではなく、指導者が話したことを聴き、聴いたことを理解し、そして語彙を使って文に表すという学びを実践している。

【学校評価における生徒アンケートより「授業や学活の時間の中で、自らすすんで発表できている」】

| | |
|-------|-------|
| 30年度 | 元年度 |
| 49.0% | 82.0% |

(2) 家庭学習に関して

- ・昨年度から「家庭学習」に対する考え方を改め、従来のような宿題という形態を排除し、授業の振り返りから繋がる家庭学習を設定し始めた。させられてきた受動の学習から自ら課題や疑問点を見つけて取り組む能動的な学習に切り替えた。昨年度は一時的に数値が減少したが、新たな取り組みが徐々に定着していくと考える。

【学校評価における生徒アンケート結果より「毎日、家庭学習に取り組んでいる」】

| | |
|-------|-------|
| 30年度 | 元年度 |
| 44.5% | 50.0% |

4. 今後の課題

(1) 基礎基本の定着、読解力、表現力の育成に関して

- ・国語科で取り組んでいる『論理的文章の読解力を高める』学習を全教科横断の取り組みとして実施していく。
- ・文章を書くときは、課題に添って文の組み立てを確認し、適切な表現技法・語彙の使い方や、論理的な展開方法を考えながら書いていくことを習慣化する。
- ・表現力を高めるための手段として語彙を増やすために、プリント学習を継続するとともに、学校と家庭での読書の定着を図る。
- ・前年度までに学習した内容の確実な定着を図るため、定期的に復習する機会を与える。また、これまでに学習してきた内容をリンクさせながら授業を展開することを心がける。
- ・読解力については、長文を集中して読めるように授業でも静かに学習する時間を創る。また、新聞のコラムなどを活用しながら論理的文章の読解の経験を重ねていく。さらに、心情・情景をノートに書き出し、班で意見を交流したり、段落ごとに内容を要約したりするなどの手立てを講じる。
- ・授業改善の中で課題設定についての教職員のさらなる考察が必要であり、課題解決に向けてのプロセスを考えさせる活動について研究を深める。
- ・授業の振り返りを充実させるために、具体的な観点を示して、生徒自身が書くようにする。
- ・あらゆる教科でテストの振り返りを掲示したり、生徒自身が選んでプリントを持っていくブースを作ったりするなど、学校全体の学習環境を整え、主体的な学びを促す。
- ・教科の単元内容を学校内及び中学校区内で共有し、系統的な指導を行うことで、記述力や表現力

を伸ばす。

- ・当該学年で習得すべき内容を確実なものとするため、また、自学自習の習慣化を図るため、学習確認プログラムの予習・復習シートの活用を促す。

(2) 家庭学習に関して

- ・授業でわからなかったことやより深めたいと思ったことを自分で調べることができるように、家庭学習につながる授業展開や授業の振り返りを行う。
- ・新学習指導要領の「主体的・対話的で、深い学び」を実践するための最大のキーワードは家庭学習であるがゆえ、家庭学習の量と質を考え、それを評価にどのようにつなげていくのかの検討をおこなっていく。
- ・家庭学習を出す量や内容を教科間で調整し、子どもたちが家庭で確実に取り組むための工夫を考える。
- ・家庭学習のリーフレットを配布し、生徒・保護者に啓発・活用を促す。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立安井小学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・30年度全国学力・学習状況調査の結果は国語・算数ともにB問題で全市平均を下回り、活用する力に課題が見られる。
- ・授業には真面目に取り組むことができるが、主体的に学習しようとする意欲に乏しい。
- ・各種学力テストから見ると、総合的に学力は向上しつつあるが、高学年になるにつれて学力低下の傾向がある。
- ・知識を発言することはできるが、自分の考えを説明することが苦手である。
- ・長文を読んで、理解することに時間がかかる児童が多い。
- ・主体的に学習に取り組む児童の育成に向けて、教職員が授業改革を進めている途中である。

2. 協力校としての取組状況

(1) 主体的な学習、記述力、表現力に関して

- ・帯時間（毎日15分間）を活用し、国語と算数を中心にプリント問題に取り組んだ。プリントの内容は、どの単元のプリントを用意すればいいのかを各担任と相談の上、加配教員が用意。（月・水曜日は、算数の問題。火曜日は語彙力をつけるための言語の問題。金曜日は読解力をつける読解の問題。）
読解の問題プリントは、問題を解く手順を児童に示し、何度も取り組ませる。（①一度文章を微音読する。②二回目は文章を黙読する。③問いの文を読む。④もう一度文章を黙読する。⑤問題を解く。）
- ・家庭での読書を推進するため、学校図書館を保護者が活用できるように、保護者の貸出カードを作成した。また、親子ともに読書する習慣のための家庭へのはたらきかけを行った。
- ・社会科、国語科、総合的な学習の時間を中心に問題解決的な学習に取り組み、主体的な学習展開を意識した授業改善を行った。

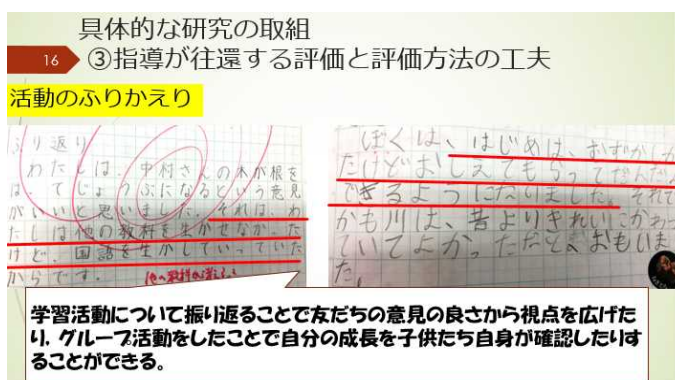


子どもが主体性を引き出すためには子どもが「知りたい」と思える教材が大切である。そのために社会科において、地域教材や子どもの関心が高まる教材を選んで開発をしている。

例えば「情報を生かす産業」では、教科書の教材ではなく、子どもがよく行く「くら寿司」で学習を進め、特別支援学級では先生が買ってきたお土産から、都道府県

の位置や特産物について学習を進めたことで意欲的に取り組んでいた。

- ・研究教科の社会を中心に、全教科でめあての提示、学習の振り返りを行っている。



学習の最後に、まとめとは別にふりかえる時間をとっている。振り返りには「学習内容の振り返り」と「学習活動の振り返り」をしている。内容をふり返ることで学んだことから考察している様子を見てとったり、活動を振り返ることで自分の成長を実感したりすることにつながる。左図には活動を振り返り「はじめはわからなかったがグルー

プで交流したことで理解できた」と自分の成長や活動の良さに気付く姿が書かれている。

- ・問題解決的な学習を実践するための「問い」や「課題」の充実を図った。

平成29年度台風18号の規模 (気象庁) 平成29年度台風18号被害 (気象庁)

| | 24時間の降水量 | 瞬間最大風速 | 建物の一部がこわれる | 浸水被害 |
|----|----------|---------|------------|-------|
| 京都 | 212ミリ | 19.7m/h | 7件 | 1110件 |
| 沖縄 | 533ミリ | 50.9m/h | 1件 | 1件 |

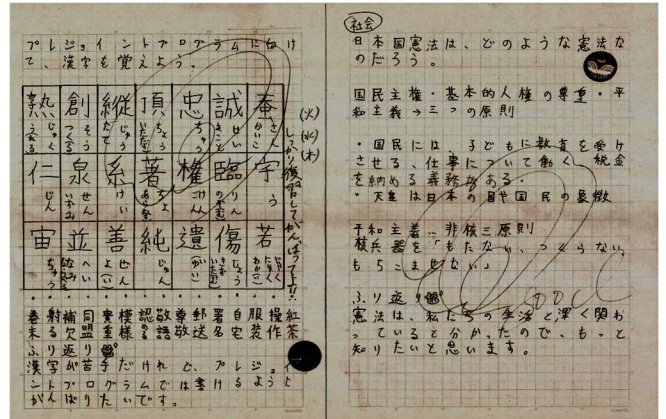
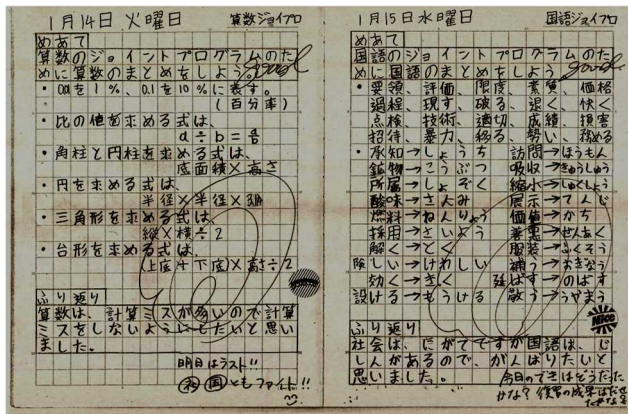
| エアコンの普及率 (総務省2014年) | |
|---------------------|--------|
| 京都 | 90, 4% |
| 沖縄 | 83, 9% |

子どもが粘り強く学習に取り組むためには、問題・課題解決的な学習が大切であると考える。そのためには質の高い「問い・課題」が重要である。それを生み出すために教材研究を進めている。例えば「あたたかい土地の

くらし」の単元では、沖縄と京都を通った台風の規模と被害を比較し、規模は沖縄の時のの方が大きいのに、被害は沖縄の方が少ないことや、平均気温の高い沖縄のエアコン普及率が低い資料を示したことで「温かい気候や台風に対して沖縄の人々はどんな工夫をしているのか」と子ども

(2) 家庭学習に関して

- ・全学年、音読、国語（漢字・言葉）、算数を基本とし、日記・自主学习を組み合わせた宿題を毎日一定量出した。
- ・個別の指導が必要な児童については、個々に応じてやりきれぬ量や時間、内容を考慮して出した。
- ・自学自習の充実のため、自主学习ノートを各学年が用意し、ノートに必ずめあてと振り返りを書くようにした。



家庭学習の自主勉強として取り組み、低学年では日記の学習を中心に行い、3年生以上は自主学習の仕方を工夫した。また、良い自主学習ノートをクラス全体に紹介し、各児童の内容の充実を目指した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 主体的な学習、記述力、表現力に関して

- ・プレジョイントプログラム、ジョイントプログラムにおける国語の「書く」領域で、全学年で全市平均を上回った。国語科や社会科を通して、学習してわかったことをまとめる、自分の考えを振り返りとして書くことを繰り返し行ってきた結果であると考えられる。

【令和元年度前期プレジョイントプログラム及びジョイントプログラムの結果

(全市平均との比較)】

国語科「書く」領域 通過率

| | 安井小 | 全市 |
|----|------|------|
| 4年 | 76 | 74.7 |
| 5年 | 69.6 | 62.4 |
| 6年 | 98.7 | 90.1 |

- ・「授業中は自ら進んで学習したり、発表したりしている」児童の割合が高学年で増えた。社会科を中心に主体的に学習を進める授業改善を行ってきた結果であると思われる。

【学校評価における児童アンケート結果より「授業中は自ら進んで学習したり、発表したりしている」】

| | 30年度 | 令和元年度 |
|-----|-------|-------|
| 低学年 | 89.3% | 83.4% |
| 高学年 | 68.2% | 74.5% |

- ・主体的な学習を展開するために、児童にとって身近な出来事や場所を教材化し、興味関心を引き出すことができる教材開発を意識して行う教員が増えてきた。
- ・社会科を中心に、単元の流れから1時間毎の授業で問題解決的な学習を意識することで、学習問題に対して、主体的に自分の問題として関わっていかうとする児童の姿が見えてきた。
- ・問題解決的な学習を進めることで、子どもが主体的に学習に取り組む姿が増えてきた。自分の考えを友達に伝えるために、自分の考えの基になる資料を提示しながら説明したり、自分の考えを友達に分かりやすく説明するため自作資料を作り説明したりする児童が増えた。

- ・朝読書を進んで行う児童は100%近いが、家庭での読書習慣の定着に課題があり、「家でも読書をしている」児童の割合が減少した。その代わりにゲームや携帯に触る時間が増えた児童が多くなったことが原因と考えられる。

【学校評価における保護者アンケート結果より「家でも読書をしている」】

| | 30年度 | 令和元年度 |
|-----|-------|-------|
| 低学年 | 89.3% | 67.2% |
| 高学年 | 68.2% | 61.3% |

(2) 家庭学習に関して

- ・家庭学習について、出された宿題はできる児童が多く、「宿題など家でしっかり勉強している」児童の割合は昨年度より低学年はあまり変わらなかったが、高学年は減少した。自主学習ノートに取り組んだことにより、内容の充実は図れたが、どんどん主体的に進められる児童となかなか進められない児童の差が現れた結果となった。

【学校評価における児童アンケート結果より「宿題など家でしっかり勉強している」】

| | 30年度 | 令和元年度 |
|-----|-------|-------|
| 低学年 | 94.1% | 94.6% |
| 高学年 | 89.3% | 82.4% |

4. 今後の課題

(1) 主体的な学習，記述力，表現力に関して

- ・主体的に学習する力を育むため、社会科・総合的な学習の時間・国語科を中心としたカリキュラムマネジメントを進める。
- ・主体的に学習を進めることのできる児童の能力を高めるため、社会科を中心に問題解決的な学習に取り組み、自ら考え解決していくことの楽しさが子どもに伝わるように授業改善をさらに進める。
- ・授業の中で、まとめ、振り返りの徹底を中学区ブロックで共通理解し進めていく。
- ・前年度の学年で課題として上がった単元や領域を学校全体で共有し、次学年の指導に活かす。
- ・基礎基本定着のために行っている帯時間での反復学習の取組を学校全体で徹底する。
- ・当該学年で習得すべき内容を確実なものとするため、また、自学自習の習慣化を図るため、ジョイントプログラムの予習・復習シートの活用率100%を目指す。

(2) 家庭学習に関して

- ・読解力の向上に向けて、家庭での読書時間の増加を目指すために、家庭での時間の使い方を児童や保護者に掲示する。保護者も巻き込んだ家庭での読書の推進に取り組む。
- ・家庭学習の進め方について、学年が進むにつれて系統的な学習方法を提示することで、発達段階に応じた家庭学習を進めることができるようにする。
- ・自学自習ノートを家庭学習の中でさらに充実させていくため、ノートがなかなか進められない児童について、個別に支援を行い、保護者と連携しながら進められるよう取り組んでいく。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 京都市 | 番号 | 59 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|---------------|
| 協力校名 | 京都府京都市立山ノ内小学校 |
|------|---------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・授業には真面目に取り組むことができるが、主体的に学習するまでに至らない。
- ・30年度全国学力・学習状況調査は全ての教科において全市平均以上の結果となった。しかし、京都市小中一貫学習支援プログラムを含め、各種学力テストから見ると、国語については「書く」「読む」に課題がみられる。
- ・朝の読書時間は読書に取り組む児童が多いが、他の時間は読書にあまり取り組めていない。
- ・自分の考えをまとめたり、発表したり文章にしたりすることが苦手である。
- ・長文を読んで、理解することに時間がかかる児童が多い。
- ・学校評価に関わるアンケートから、自主的な家庭学習の定着が十分とは言えない。自主学習として計算問題や漢字練習に取り組む児童が多く、探究的な課題を行う児童が少ない。

2. 協力校としての取組状況

(1) 主体的な学習、読解力、表現力に関して

- ・全教科で学習課題（めあて・目標）を提示し、学習の振り返りが適切であるかを教員が省察した。
- ・子どもに興味をもたせ、考えさせるような授業づくりを柱とし、授業改善を行った。
- ・話す・聞く姿勢に関して、各授業で教員が児童に声をかけるようにした。
- ・読書ノートを活用した朝の読書タイムやボランティアによる読み聞かせを行った。
- ・各種調査結果を学級ごとに分析し、弱点や改善点等を明確にするとともに、児童の主体的な学びにつながる授業改善の充実につなげるため、教員による自主的な授業研究会を実施した。
- ・国語科「書く」「読む」において、カリキュラムマネジメントを活かしながら、他教科とも関連を図りながら、学習を進めるようにした。
- ・自分の考えをまとめることについては、めあてに戻ったり、本時の大切なキーワードを意識したりすることによって、自分の言葉でまとめを表現できるようにした。また、思いを伝えることについては、ペアや少人数のグループで、話す必然性のある学習を意図的に組み込みを進めた。
- ・長文の読解については、読書の質を高めるようにした。また、読書活動については、担任による読み聞かせやブックトークなどを取り入れることで、子どもが進んで読書に向かえる環境を心掛けた。

- ・「書く」取組においては、継続して進めていく一方、「読む」の取組については、読書の取組を再検討すると共に、新聞を用いた教材を活用できるようにした。

(2) 家庭学習に関して

- ・家庭学習の量を全校で統一した。
- ・1, 2年は「あのねノート」(日記), 3年以上は「自習学習ノート」を使用し, 週1回程度の自学自習を取り入れた。
- ・7月に「家庭学習のすすめ」のリーフレットを作成し, 個人懇談にて保護者に説明し理解と協力を求め配布した。また, 教職員でも共通理解を行った。
- ・家庭学習については, 良い取組方をしている児童を紹介し, テスト勉強に留まらず, 予習や追究的な家庭学習を推奨した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 主体的な学習, 読解力, 表現力に関して

- ・意図的に各学年で必ず小集団での話し合い活動や授業のまとめ段階で書く活動を積極的に取り入れたことで、「読む」については改善傾向にある。しかし、「書く」ことについては、まだ課題が残る。理由として、書くことに抵抗があったり、学習で自分の思いや考えを深められなかったりしている。今後も、これまで以上に小集団での話し合い活動や授業の振り返り段階で書く活動を積極的に取り入れ、「読む・書く」を大切にした授業づくりを進め、思考力・表現力の育成を目指す。また、読書の質や内容の向上を図るために、読書ノートの効果的な活用等の読書指導や、図書館の活用の仕方について指導していく必要がある。
- ・国語では漢字の読み書き、言葉(修飾語や熟語の意味など)の問題で、算数では数と計算の領域で全市平均を下回っている。理由として、基礎基本の取組が徹底できなかったこと、下位層への手立てが不十分だったことが考えられる。
- ・話す・聞く姿勢については徐々に良い姿が見られ始めてきたが、「授業で自分の考えや意見を進んで話している」児童の割合は低学年ではやや減少した。この項目を挙手による発表と捉えている児童がいると思われる。引き続き、「話す・聞く」の徹底した指導の後に、ペアやグループで話し合うことを定着させていきたい。高学年については、学習意欲を引き出し、主体的・対話的で深い学びへつながる授業づくりが必要であり、教員研修、研究の充実が求められる。

【学校評価における児童アンケートより「授業で自分の考えや意見を進んで話している」】

| | 30年度(7月) | 30年度(12月) | R1年度(7月) | R1年度(12月) |
|-----|----------|-----------|----------|-----------|
| 低学年 | 77.8% | 83.5% | 83.0% | 81.7% |
| 高学年 | 72.6% | 69.9% | 71.1% | 71.1% |

- ・教職員は、すべての教科において、学習課題(めあて・目標)の提示と学習の振り返りが、いつも適切であるかを省察し、日々の授業で考えることを大切に実践しようとしている。今後も主体的・対話的な学びを重視し「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」が実感できる授業改善を通して、「すすんで学ぶ」主体性を育てる取組を、次年度も継続していきたい。

- ・夏季に実施された4～6年生の京都市小中一貫学習支援プログラムの総合成績について、京都市平均を4年生は2ポイント、5年生は4ポイント上回っていた。6年生は京都市平均と同等であった。
- ・京都市小中一貫学習支援プログラムの国語科「書く」においては、国語以外の教科でも、文型を示したり、段落や字数を意識したりして書く活動を多く取り入れたことによって、正答率が前回よりも大きく改善された。
- ・学力向上部の取組により、課題と考えられる単元や領域を分析して、カリキュラムマネジメントを行いながら、他教科との関連を図るように努めた。
- ・12月実施の学校アンケートでは、自分の思いや考えを話すことについて、不十分と考えている低学年は18%、高学年は29%で、7月実施のアンケートと変化は見られない。
- ・読書週間では、子どもが読書に取り組めるように、教職員や図書委員会の児童が積極的に読書を働きかけた。また、読書や物語文については、5W1Hを意識するような読み取りを心がけるようにした。「読む」領域において、少しずつ成果が表れてきた。

(2) 家庭学習に関して

- ・学習時間の目安（15分×学年）を達成している児童の割合は、学年が上がるにつれて低くなる。高学年になっても低・中学年時と同様に放課後を過ごしていることが考えられる。R1年度の5年（H30年度4年）やR1年度4年（H30年度3年）の変容を見ると、学習時間の改善が行われた。

【学校評価における児童アンケートより「平日、家庭での勉強時間」】

| | 0分 | | 1～29分 | | 30～59分 | | 60～89分 | | 90分～ | |
|----|-------|------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|
| | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 |
| 3年 | 3.2% | 5.6% | 27.0% | 19.4% | 33.3% | 26.4% | 28.6% | 27.8% | 7.9% | 20.8% |
| 4年 | 5.6% | 8.1% | 18.3% | 11.3% | 38.0% | 40.3% | 23.9% | 27.4% | 14.1% | 12.9% |
| 5年 | 0.0% | 0.0% | 3.8% | 14.1% | 42.3% | 36.6% | 23.1% | 28.2% | 30.8% | 21.1% |
| 6年 | 4.4% | 0.0% | 17.6% | 16.7% | 32.4% | 25.0% | 23.5% | 29.2% | 22.1% | 29.2% |

- ・宿題はしっかりとできているが、自習学習ノートの取組状況は子どもによって差がある。調査探究的な課題に取り組む児童が少なく、計算問題や漢字練習をする児童が多い。
- ・自学自習の時間は学年が上がるほど多くなっている。

【学校評価における児童アンケートより「平日、宿題以外の勉強時間」】

| | 0分 | | 1～29分 | | 30～59分 | | 60～89分 | | 90分～ | |
|----|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|------|
| | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 | H30年度 | R1年度 |
| 3年 | 20.6% | 13.9% | 46.0% | 45.8% | 22.2% | 27.8% | 7.9% | 6.9% | 3.2% | 5.6% |
| 4年 | 15.5% | 17.7% | 56.3% | 40.3% | 18.3% | 24.2% | 1.4% | 9.7% | 8.5% | 8.1% |
| 5年 | 11.5% | 11.3% | 48.1% | 47.9% | 11.5% | 18.3% | 26.9% | 16.9% | 1.9% | 5.6% |
| 6年 | 14.7% | 12.5% | 25.0% | 50.0% | 25.0% | 16.7% | 16.2% | 12.5% | 19.1% | 8.3% |

- ・漢字テストの復習や計算の反復練習は自学自習の時間に行えるようになってきた。
- ・家庭学習について、授業終了後にもった疑問を、自学自習で調べる児童も増えてきた。
- ・教職員の意識づけは、しっかりとできつつある。放課後に宿題をすることなく、家庭でするよう声をかけるようになった。

4. 今後の課題

(1) 主体的な学習、読解力、表現力に関して

- ・京都市小中一貫学習支援プログラムでは、さらなる成果が上げられるように、学力向上部による分析・考察を進めながら、カリキュラムマネジメントを推進する。予習・復習シートは、100%の使用率だった。活用するまでに至ることは今後の課題である。
- ・理科・社会・総合的な学習など調査探究的な自学自習に取り組める環境整備として、図書司書の授業活用をする等の取組を進める。
- ・話す・聞く姿勢の変容については、学年に応じて系統的に全校統一した言語スキルを徹底して習慣化を目指す。
- ・児童が学びたくなるような導入や思考を深める発問の工夫をしたり、板書には集団思考を深めたりしながら、深い学びの質を高められるよう、一人一人の教員が授業力向上を図る。
- ・読書の取組について、担任が読み聞かせやブックトークを今後も継続して行い、読書ノートを十分に活用できる取組を進めたい。
- ・新聞については、新聞を取っていない家庭が多くなっているため、学校全体で計画的に授業の中で取り組んでいく必要がある。

(2) 家庭学習に関して

- ・家庭学習リーフレットについて、教職員の意識づけの資料としては、十分活用できたが、児童や保護者が効果的に活用できるよう継続的に働きかけていく必要がある。
- ・家庭学習のあり方については、定期的に校内で学年の現状や状況を話し合う機会を設けていく必要がある。
- ・調査探究的な課題内容の自学自習の仕方を紹介し、さらなる追究へと意欲が続くような自学自習となるように、しっかりと継続した支援を続ける必要がある。